

# 1. 研究室活動報告

## A. 教育哲学研究室

○1966年7月にICU教育哲学研究会が発足した。これは本学の教育哲学関係教員、大学院学生を主なメンバーとし、その他教育哲学に関心を持つものも入会することのできる研究グループである。小島・秋田両教授の提唱により会が結成され、大学院学生の谷、小村両君が幹事として世話役を務めている。現在までに以下の4回の会合がもたれ、毎回10数名の出席をみている。

第1回 1966年7月18日

「木下尚江における民主的人間像の研究」 鈴木美南子さん

「エラスムスのキリスト教ヒューマンイズムの構造

——Enchiridion Militis Christiani を中心に——」 池田洋子さん  
二人とも本学大学院修士課程の卒業生であって、その修士論文について発表した、特にこの日はそれに先だって会務一般についてとり決め、川瀬助教授送別の昼食会をひらいた。

第2回 1966年11月5日

「デューイにおける自由と統制をめぐる」 小島軍造教授

第3回 1966年12月3日

「期待される人間像——特にその内容をめぐって——」 讃岐和家助教授

第4回 1967年1月21日

「教養教育について——その哲学的背景としての Perennialism と Progressivism」 小林哲也助教授

○1966年10月21、22の両日、本学ディップフェンドルファ記念館において教育研究所の後援により日本デューイ学会第10回大会が開催された。主催校として小島教授、讃岐助教授、谷助手（非常勤）を中心とする当研究室スタッフが準備、運営に当たった。R. ウーリック博士の記念講演「Contemplation on the Philosophy of John Dewey」をはじめ二日に亘って8つの研究発表がなされ、最後に「デューイにおける自由と統制」と題するシンポジウムが持たれた。天候にも恵まれ多数の出席者を得て盛会であった。参会者それぞれに得るところ多くあったものと思われる。大会運営にあたって、学内の諸部署より御理解と御協力を賜わったことに感謝する次第である。

○本研究室にとって特に記念すべきことはハーバード大学名誉教授ロバート・ウーリック博士の来学を得たことである。博士は1966年10月と11月大学院授業科目「教

育思想史研究」を担当し、その他学内外における講演において多くの学生、研究者に感銘を与えた。

次にスタッフ各個人の研究活動状況をみてみる。

#### a. 教育哲学

日高教授（客員教授）：1966年3月に専任教授を辞し、同年4月より客員教授として引き続き大学院学生の研究指導に当たっている。「教育基本法」の哲学的背景について研究を続けている。なお、これまで執筆した19篇の小論を集録した論文集「民主教育の回顧と展開」（学習研究社、1966年4月）を刊行した。

小島教授：日本デューイ学会第10回大会（1966年10月、本学において開催）におけるシムポジウムに参加して、「デューイにおける自由と統制」について研究発表を行なった。その他、研究の成果を次のような機会に発表した。

○学校教育全書⑯道德教育に「道德教育の目的としての民主的人間像」（1966年2月）、○小林澄兄博士喜寿記念論文集に「道德教育の効果と教育のゆくえ」（1966年6月）、○民主教育協会のI D Eに「自由を平等に」（1966年9月）、○道德と教育に「わがくにの民主主義は健在であろうか——特に自由の問題をめぐって——」（1966年9月）

讃岐助教授：実存主義の教育思想を中心として、西洋教育思想史の研究を続けている。

川瀬助教授：1966年9月より Harvard-Yenching Institute において、visiting scholar として研究中。現在の研究主題は、ユダヤ・キリスト教的及びギリシヤ的伝統の中における人間観（教養理想）と職業倫理との関連を歴史的に追求することをめざしている。現在の段階では特に中世から近世への転換期に重点をおいている。さらに、この時期における職業倫理の確立と、伝統主義的社会の拘束を打破する近代的集団の形成との内面的関連をさぐることに、またこのプロセスにおいて日本の場合との比較がひきつづく課題としてあらわれてきている。

黒田助手：ジョン・デューイの教育思想、特にその「成長」その他の重要な概念の意味に関心をもって研究をつづけている。特に、デューイ批判の一派を代表するウーリック博士の教育哲学をまなび、日本デューイ学会第10回大会で「Growth と Self-transcendence」と題して発表した。

#### b. 基督教教育哲学

長教授：近代日本思想史の研究を、キリスト教と日本の伝統的思想とのかかわる点に焦点をおき、人間形成の思想の問題として研究を続けている。1964年8月にベルリンに於て開催され参加した World Council of Churches と World Council of Christian Education の共同計画による変革しつつある世界における「教育」の研究委員会の第1回研究会にひきつづき、1965年夏にロンドンで行われた第2回

研究会に参加した。帰国後、1965年9月よりアメリカのプリンストン大学に招かれ、1年間滞在、研究活動を行い、1966年8月よりハーバード大学に移り、引き続き研究に従事している。1967年1月に新教出版社より「土着と背教」を出版。

秋田教授：「人間形成のキリスト教的基礎」研究の一部として、論文「ヘブライ的人間の歴史的実存自覚」をまとめ、「キリスト教と文化Ⅲ」（キリスト教と文化研究所3月発行予定）に載せる。その他、研究課題に関し、数度にわたり学会、研究会などで研究経過報告を行った。上記主題に関連のある講義をICU以外に東京大学文学部、成蹊大学文学部において行った。なお、文部省科研総合研究「倫理学基礎概念の研究」および「近代アメリカ倫理思想の研究」に共同研究者として加わった。1967年4月から、キリスト教文化学会の理事（長）として学会の仕事を引受けることになった。

関屋講師：願い出に依り、昨年8月末を以て、専任教授を辞した。しかしなお非常勤講師として勤務、教育研究所並びに「キリスト教と文化」の研究所に属し、また従前のように人文科学科の諸講義を担当している。昨年12月岩波書店出版の、南原、高木、鈴木氏等編纂による「三谷隆正——人・思想・信仰」の中で「三谷先生について思う」の一文を執筆また同じ12月待晨堂書店刊、津上毅一編著「栗屋仙吉の人と信仰」に於ては「原爆に仆れた信仰の先輩——栗屋仙吉氏のこと」が掲載された。これら評伝的叙述は、現代日本人の人間形成の問題に係わりを有ち、講師の参加して来たキリスト教教育哲学の問題考察に関し、その人間像描出の試みの一環と見做すことも出来よう。

### c. 比較教育学

小林助教授：1965年9月ミシガン大学および、コロンビア大学での3年の留学を終えて帰国、復職した。ミシガン大学に提出した博士論文 *General Education for Scientists and Engineers in the United States of America and Japan*, 404pp. が1965年9月に同大学教育学部より出版された。帰国後の主な研究活動を次に記す。

1. 1965年1月、日本教育学会大学制度研究委員会「大学設置基準改善要綱」等研究小委員会のメンバーとして「大学設置基準改善要綱」等にかんする意見書の作製に参加
2. 1966年3月、日米文化教育会議に専門委員として参加
3. 1966年5月27日、日本比較教育学会第2回大会で「比較教育学の方法論」を発表
4. 1966年6月、財団法人三島海雲記念財団より教養教育についての研究補助金を受ける。
5. 1966年9月6日、日本教育学会第25回大会で課題研究「教育学研究における比較の問題」発表
6. 1966年10月9日、教育哲学会第9回大会で研究討議「現代における大学の使命」

において「教養教育について」と題して発表

7. 1966年12月, 日本教育学会機関誌「教育学研究」第33巻第3号に「最近の比較教育学の動向とその課題」を寄稿

デューク助教授: 1965年よりICUで毎年催される日本地域研究サマー・セミナーの責任をもつことになった。そのため、北米各地よりセミナーへの参加者を募り、必要な準備を行う目的で、1965, 1966と各年とも3ヶ月間にわたり米国へ旅行した。その間、Bucknell, Pennsylvania State, Susquehannaの諸大学で比較教育学、ことに日本及び、アジアの教育について講義を行なった。発表した主な論文は以下のようなものである。

1. AMERICAN EDUCATIONAL REFORM IN JAPAN TWELVE YEARS LATER, Harvard Educational Review, Fall Issue, 1964. 同じ論文は“Readings in Comparative and International Education”, Random House, N. Y., Fall, 1966 にも収録された。
2. THE IDEAL IMAGE OF A JAPANESE, AN OFFICIAL INTERPRETATION, Times Educational Supplement, London, April 2, 1965
3. THE KARACHI PLAN: MASTER DESIGN FOR COMPULSORY EDUCATION IN ASIA, UNESCO International Review of Education, Hamburg, Germany, Vol. XII, No. I, March, 1966
4. CONFLICT AND TURMOIL WITHIN THE JAPANESE UNIVERSITY SYSTEM, Malaysian Journal of Education, University of Singapore, June, 1966
5. THE JAPANESE TEACHER, A LIFETIME OF CONIROUERSY, Indian Journal of Social Research, Meerut, India, Dec., 1966
6. THE DUALISM IN ASIAN EDUCATION, Comparative Education Journal, Oxford University, England, Vol. 3, No. 1, 1964

現在の研究主題としては、「真珠湾」から「広島」までの太平洋戦争の歴史が教科書でどのように記述され、如何に教えられているかを日本、アメリカ、フィリピンの中高等教育段階の諸学校について比較研究を続けている。

## B. 教育心理学研究室

1965年及1966年度はスタッフの異動の多い年であった。岡部教授が1965年度をもって定年退職され上智大学に行かれたのをはじめ、Troyer 教授が1966年8月退職され帰国された。星野助教授がサバチカルリーブで1966年9月から京大の人文科学研究所に行かれた。遠藤助手が渡独のため1966年4月で退職し、その後後任として非常勤助手、鈴木百合子と東尚子が新たに加わった。スタッフ各個人の活動および研究状況は次の通りである。

都留教授：Ⅰ 1) 1966年4月教育学科教授，教育学科長，教育研究所長となる。2) 引きつづき学生相談室主任として学生相談を担当。学外における活動は，1) 65年度に引きつづき今年度も三鷹市教育相談所および武蔵野市教育相談所の顧問を引き受けている。2) 立教大学キリスト教教育研究研究所主催，第8回（1965年夏），第9回（1966年夏）教会生活研修会に指導員として参加，3) 茨城キリスト教大学カウンセリング研究所主催カウンセリング研究会（1966年8月）に世話人として参加，4) 日本臨床心理学会機関誌「臨床心理」の常任編集委員に就任（1966年秋より），5) 日本臨床心理学会主催のスーパーバイザー研修会に参加（1967年1月）Ⅱ 出席した学会は，日本臨床心理学会（1965年11月，66年10月），厚生補導研究集会（1966年10月），日本教育心理学会（1965年10月）である。Ⅲ 1966年3月よりICU心理学研究員，卒業生その他の関係者を中心として，岡部先生の監修の下に *Psychology of Personality* の和訳をすすめている。

星野助教授：Ⅰ 1) 児童生徒の社会化過程に関する6ヶ国共同研究に参加し，現在は集計結果の検討と最終結果のまとめを進めている。昨年7月25日～8月2日にはコペンハーゲンにおいて開かれた共同研究のうちあわせの為の会議に参加してきた。本年9月中には日本の分についてまとめが仕上がる予定である。2) 文部省科学研究費による総合研究「家族関係と人格形成」第二班の分担研究者として子供の *achievement motive* を測定する尺度の作成を試みている。3) 青山学院の宗教センターの生徒のキリスト教の知識，理解，意識，態度の逐年研究の専門委員会に参加している。4) 先にのべたようにICUのサバチカルリープを利用して学術振興会流動研究員として9月より京都に滞在。京大人文学研究所の重層社会の研究班例会に出席している。Ⅱ 学会では教育心理学会第8回総会に於ても上に述べた6ヶ国共同研究の一部「生徒，児童の社会的規範権威に対する態度」を発表。また臨床心理学会第2回総会に於ても発表を行った。その他日本心理学会第30回大会（於名古屋）児童精神医学会（於京都）日本民族学会等に出席した。国外では，モスクワ大学で8月4日～10日まで開かれた第18科学的心理学国際会議（ICSP）に出席した。Ⅲ 文献では教育相談事典（金子書房）の数項目を担当した。

原助教授：1964年4月から1965年11月まで Pennsylvania State University 動物行動研究所研究員として大脳連合領皮質の比較神経学的研究を行った。1965年11月現在，大学生の価値観研究，入学試験の追跡研究，大脳皮質損傷による視床核の組織学的変化の研究を行っている。Ⅱ 学会発表は1965年9月 National Institute of Health のシンポジウム（於 Maryland）で “Posterior Association Cortex and Learning” を，1966年5月の比較教育学会シンポジウム（於八王寺）で「アメリカの大学入試制度」を，1966年10月の日本心理学会大会（於名古屋）の口頭発表で「側頭葉損傷の図形弁別学習に及ぼす影響」を，1966年9月日本教育心理学会（於大阪）の口頭発表で「大学生の価値観研究(5)——‘自己’と‘他人’の道德判断」

Ⅲ. を行った。著作では読売新聞社出版事典・現代を考えるの中の「試験」の章を担当。

古畑助教授：Ⅰ. 研究テーマは対人関係の心理（㊤対人関係と人格形成，㊦対人関係と学習）である。1) 文部省科学研究費による試験研究「道德性の発達とその規定因」の分担研究者として「家族集団，同輩集団と道德性の発達」をテーマとして研究をすすめ，他方同研究費による「家族関係と人格形成」の分担研究者として「均衡理論の適用による母—子関係の研究」のテーマで共同研究を続けている。

Ⅱ. 学会発表としては1965年の日本心理学会第29回大会で「課題遂行に及ぼす協同，競争および対人関係の効果（その1）（その2）の口頭発表を行った。Ⅲ. 1965年度以降執筆した著書は，1) 競争と協同，児童心理 1965年，19巻4号121—133頁。

2) 学習の心理，岡部弥太郎，沢田慶輔(編)「教育心理学(新版)」東京大学出版会，1965年，54—89頁。3) 評価の一般的手続き，海後宗臣，高坂正顕(監修)学校教育全書15「道德教育」全国教育図書，1966年，434頁。4) 社会的発達，人格の発達，青年と人間関係(2)，沢田慶輔(編)「青年心理学」東大出版会，1966年81—108頁，209—224頁。5) アニミズム，概念，均衡理論，自己記述・認識・レディネス等19項目。平塚益徳，沢田慶輔吉田昇(編)「教育事典」小学館，1966年，6) 競争・同一視等4項目，桂広介，倉石精一，沢田慶輔(監修)「教育相談事典」金子書房，1966年がある。この他に印刷中乃至は出版社の手許にあるものに 7) デ・ソト：社会構造の学習，田中靖正(訳編)「個人と社会」日本評論社，8) 社会的行動の発達，教師養成研究会(編)「幼児の心理(新版)」学芸図書(近刊) 9) ボスとリーダー，競争と協同，教師養成研究会(編)「幼児の社会性指導(新版)」学芸図書 10) 教師，児童集団，日本児童研究所(編)「児童心理学の進歩」(第6巻)(1967年版)，金子書房，11) 他に目下執筆中2編，改稿中1冊がある。

ベイル助教授：現在進行中の研究としては，(1)1964年と1965年のクラスの外国人学生(ICUの)に関する追跡研究 (2)1966年度の外国人学生と，1964年，1965年の外国人学生との比較研究 (3) Kuper 興味検査結果をもとに，1965年の一年生の専攻分野の選択に関する分析研究を行っている。

鈴木助手：1966年東京都立大学の博士課程を修了して4月から本学の非常勤助手となった。Ⅰ. 古畑助教授のもとに東助手，大学院学生2名と共に「均衡理論の適用による母—子関係の研究」(先述)の共同研究をを行っている。Ⅱ. 1965年7月の日本心理学29回大会のシンポジウムでは「構造バランスモデルの問題」について述べた。Ⅲ. The Role of Social Norms and Leadership in Risk-Taking, *Sociometry*, Vol. 29, No. 1, 16—27, 1966 は，著者が1963—64年にかけて，ミシガン大学に留学中米人学生と行った共同研究である。

東助手：1966年3月東京大学大学院修士課程修了後，4月より研究室に非常勤助手として加わった。修士論文は「プログラムのステップ構成の効果」。Ⅱ. 9月の

教育心理学会に於て、修論の一部「プログラム学習の効果に関するステップ構成と学習者の能力との交互作用」について口頭発表をした。

1966年8月28日～31日まで本栖湖畔の国民宿舎で、研究室スタッフ6名、学生10名が参加してICU夏の夏期セミナーを行った。秋のICU祭では、教育心理学研究室としてはじめて研究や実験器具の展示を行い、また希望者に心理テスト（性格検査ならびに職業興味検査）を実施して反響をよんだ。

### C. 視聴覚教育研究室

例年、本学視聴覚教育研究室の主催によって開かれてきた視聴覚教育研究協議会は、一昨年来日本視聴覚教育学会設立の母体としての重責を果してきたが、昭和41年度の第13回大会を最後に発展的に解消されることとなり、本年以降は、日本視聴覚教育学会大会は独立して、全国の大学で、持ち廻りで開催されることとなった。ICUでの最後の研究協議会は、昭和41年7月26日、27日の両日、日本視聴覚教育学会と共催という形で、DMHで開催された。主なプログラム内容は次の如くであった。

研究発表 23件

シンポジウム 「視覚コミュニケーションの展開」

〃 「視聴覚教育における学習理論の適用」

また、これに続く7月28日、29日の両日、第12回放送教育研究協議会が開催され、次のシンポジウムが行われた。

「放送メッセージにおける意味の伝達」

「学校放送番組についての合評会」

#### 〔個人研究活動・その他〕

西本教授は、昭和40年6月、シベリヤ経由で、ソ連、フィンランドの教育を視察、ストックホルムで開かれた第7回国際教育通信教育学会に出席し、学会終了後、西欧諸国および東独の教育を視察し、帰途、アラブ連合、インド等を歴訪して7月中旬帰国した。同年8月、東京学芸大学で開かれた日本教育社会学会第17回大会において、シンポジウム——「放送を利用した勤労青少年の教育」に提案者をつとめた。

同年11月、東京大学より教育学博士の学位を授与された。なお、昭和41年3月刊の“教育の近代化と放送教育”（日本放送出版協会発行）は学位論文の一部である。また昭和40年12月西本教授編“視聴覚教育50講”が日本放送教育協会から刊行された。

昭和40年10月東京で開かれた第一回日本賞国際教育番組コンクール、及び昭和41年11月大阪で開かれた第二回同コンクールにおいて、審査委員長、ラジオ部門の主査をつとめ、教育放送番組の向上と国際理解の増進に貢献した。また、WCOTP（世界教職員団体連合）の委嘱により、昭和41年8月12日から5日間、ホテルニュー

オータニを会場にして視聴覚ワークショップを主宰したが、海外及び国内から各々約 60 人の参加者があった。そのほか、同年11月東京で開かれた第17回放送教育全国大会に参加し、また12月6日、ユネスコの主催で開かれたアジア地域初等教育研修会において、“The Developments of New Educational Technology in Japan”と題して講演を行った。

布留教授は、前述西本教授編「視聴覚教育50講」(日本放送教育協会発行)に「テレビ教育の理論の研究」を担当し執筆した。また昭和39年以来、石本助手とともに行っていた「僻地児童のテレビ教材に対する認知能力の研究」について、第12回放送教育研究協議会(昭和40年7月)及び日本教育社会学会第17回大会(昭和40年8月)において報告を行った。この研究の詳細については、放送教育研究集録第11号に同名のタイトルで論文を掲載している。また研究協議会のシンポジウム「放送メッセージにおける意味の伝達」に提案者をつとめた。昭和41年12月刊行のNHK 総合放送文化研究所編「放送教育の理論と研究」に「家庭教育とテレビの役割」と題して一章を担当した。昭和41年10月新潟で開かれた日本教育社会学会第18回大会では『メディア行動を予測する変数』というテーマで研究発表を行っている。このほか近く刊行予定の Studies on Broadcasting No. 7 には“The Functions of TV for Children—A Cross Cultural Study—”が、またICU 教育研究第12号(本号)には「児童は何故テレビを見るか」が各々掲載される予定である。

なお、日本視聴覚教育学会理事、同学会紀要編集委員長、ならびに日本教育社会学会評議員として活躍している。

中野照海助教授：学会関係—1965年8月日本教育方法学会設立大会において、課題研究「ティーム・ティーチングの理論的背景」の発表をおこなう。同年第17回日本教育社会学会において、布留教授他と共同研究「僻地児童のテレビ教材に対する認知能力の研究」を発表。1966年7月第2回日本視聴覚教育学界において、「映像コミュニケーションの課題」の討論者となる。1966年10月第18回日本教育社会学会大会に、「マス・コミュニケーション部会」の司会者として参加。1966年8月WCOTPのワークショップにおいて「A Trend of Programmed Instruction in Japan」の発表をおこなう。

なお1964年に続き、現在にいたるまで、文部省「視聴覚教育研究企画委員会」および「視聴覚教育研究専門委員会」の委員を継続、1967年「放送と教育」の執筆。放送教育研究全国連盟の委嘱を受け、1965年8月「東日本特別研修会」で連続講義第17回全国大会ほか、ブロック大会、県大会において講演、助言をおこなう。なお、東京都放送教育研経会主催の1965年度、1966年度の連続セミナーの主任講師をつとめる。

出版関係—「視聴覚教育五十講」(日本放送教育協会)中の四講、「産業視聴覚ハンドブック」(丸善)の2章担当。「視聴覚教育事典」(明治図書、進行中)の編集と項



目分担。「教育心理学辞典」(金子書房, 進行中)の“マス・コミュニケーション”と“視聴覚教育”の約100項担当。教育方法学会編「教授過程Ⅱ」(明治図書, 進行中)“ティーム・ティーチング”担当。「家庭教育講座: テレビと教育」(暁教育書房, 進行中)の“テレビとこども”の章を担当。その他雑誌, 「放送教育」, 「視聴覚教育」, 「学校運営」, 「英語教育」, 「現代英語教育」, 「VTR教育」に論文を掲載。

石本助手は, 昭和39年以来布留教授の指導のもとに前述“僻地児童のテレビ教材に対する認知能力の研究”を継続中であったが, その結果を第12回放送教育研究協議会及び日本教育社会学会第17回大会で布留教授と連名で発表し, その詳細については放送教育研究集録11号に掲載した。また, 西本教授編「視聴覚教育50講」の“視聴覚教育研究法”を, 中野助教授, 阿久津助手とともに担当執筆した。

平田助手は“Tachistoscopic Recognition of Japanese Letter Materials in Left and Right Visual Fields”と題する論文をまとめ Psychologia 誌に発表した。研究は「視覚コミュニケーションにおける概念の問題および視覚的情報の受容 人間知覚体制の問題について」をテーマに基礎的な実験の準備をしている。

#### D. 理科教育研究室

現在の専任職員は, 博士課程・修士課程を通じて,

生物: S. A. Hoslett 教授, 篠遠喜人客員教授

化学: 大内謙一教授, 湊 宏助教授

物理: D. C. Worth 教授, 原島 鮮教授

と助手として中山和彦氏から構成されている。

非常勤講師には渡辺正雄教授(自然科学史), 山柊雅信教授(理科教材)をお願いしている。

篠遠教授はICUの自然科学の生みの親でいられるが, 大学院の理科教育法もその発足当時から発展に尽され, 今日客員教授としてICUの教育また一般の生物教育界に活躍されている。

最近の活動の主なものは, 日本で1967年1月16日から21日までの間, “大学における生物教育の日米会議 “US—Japan Conference on College Biology” が開かれたとき, この会議の委員長を篠遠教授が勤められ, ICUからは Hoslett 教授, 中山助手が大学院から, 勝見助教授, 沖垣助教授が教養学部から参加された。これらの方々も含めて, 日本側から17名, 米国からは9名出席された。最後の日の1月21日は, ICUを会場とし, 会議の後リセプションなどが持たれ, 大きな成果がえられた。主な題目は

カリキュラム, 設備, 実験, 農学・医学を目指す学生にたいする生物教育, 教授養成, 実験技術, 視聴覚教育などであった。

篠遠教授を中心とする ICU の大学院理科教育法のグループが日本の生物教育の中心であることは喜ばしいことである。

中山和彦氏はフィリピンに開かれた生物教育会議に招かれ、他の各地をまわって帰えられた。本年の夏は米国で講演される予定である。

物理教育法、化学教育法の部門でもそれぞれ活躍されている。

昨年 (1966 年) 12 月新しくできた理学本館に移転 (同館 3 階) し、研究上非常に便利となった。(原島 鮮・記)

## 2. 大学院教育学研究科修士論文 (1965 年 及び 1966 年卒業者)

1965 年 3 月卒業者 9 名

A 教育哲学 なし

B 教育心理学 なし

C 視聴覚教育法 (2)

斎藤香代子 聴覚言語教材による英語学習の評価に関する一考察

White, James D. School Broadcasting in Japan

D 英語教育法 (6)

福原 和子 On the Significance of "Coupling" in English Poetry-  
Especially in the poems of Emily Dickinson and A. C.  
Swinburne

古海美智子 The Accentual Problems of the Japanese Students of  
English

平河内健治 A Synchronic Study of Assimilation with Special Re-  
ference to Modern English and Japanese with Compar-  
ison and Some Predictions of Difficulties and Easiness  
in Acquiring the Assimilatory Features

小林 祐子 Acquisition of the Sound System of a Second Language  
in Infancy —A case study in linguistic interference—

久保田妙子 A Study on Verbs Occurring after the —*te* Form of the  
Verb in Japanese

田島 穆 Passive Construction Patterns in Japanese and English

E 理科教育法 (1)

高杉 重光 A Study of the Objectives of Fisheries Education in  
relation to the Fisheries Industry

1965 年 7 月卒業者 3 名

英語教育法 (3)

井出 祥子 A Comparative Ethno-Linguistic Study of Japanese and  
English Color Words

Mulé, Walter A Study of the Structural Bases of American Humor  
and Their Implications in the Teaching of English

野村恵美子 A Descriptive Study of the Occurrence and Non-Occurrence of the Japanese Relational Particle *o*

1966年3月卒業者 23名

A 教育哲学 (2)

川崎 潔 夏目漱石に於ける自己形成(高等学校期まで)

高木美南子 木下尚江における民主的人間像の研究

B 教育心理学 (4)

信国 恵子 手がかりの明瞭度の概念達成に対する効果

大内 長子 定時制高校生の非行—非行性の研究

レイノルズ・ミヲ K 文章完成法 — その理論と実際

山中美智子 精神身体症における身体像と不安

C 視聴覚教育 (6)

且 洋子 ラジオ学校放送音楽鑑賞番組の提示様式に関する一実験的研究

藤井 恵 外国語学習における語学ラボラトリーの効果に関する事例研究  
—津田塾大学の場合—

堀 達陽 簡易LLの学習効果に関する実験研究

小畠 雅敏 録音教材利用における視覚的補助の効果についての実験的研究  
—特にロシア語発音教授について—

田島富美江 プログラム学習に関する実験研究

富永 坦 テレビ理科番組におけるプログラムシート使用の効果に関する  
一実験的研究

D 英語教育法 (5)

原 吟子 The Comparison of the Various Expressions of the Future  
Tense

仲野 晃康 Some Stylistic Features in *Leaves of Grass*

小木野 一 A Dynamic Approach to Two-Verb Constructions in  
English

重本美代子 Hemingway, As Seen from a Stylistic Approach

杉田 洋 An Approach to a Generative Grammar of Japanese  
—A Study of Japanese Noun Modification—

E 理科教育法 (6)

原 元子 大学初年級の数学教育と物理教育との関係

川尻 瑞穂 量子力学とその物理教育への導入 全反射の教育資料  
—物質波の全反射現象に光波を類推として使用する問題について—

- 齋藤 章子 熱力学的な平衡条件と凝固点降下  
 相馬 勇三 Studying and Teaching of X-Ray Diffraction  
 高橋 勝久 Quantum Theory and Its Introduction to Physics Education —Structure of the Atom—  
 吉原 道子 A Study of Demonstration Connected with Nuclear Physics in High School Physics Courses

## 1966 年 7 月 卒業者 5 名

## A 教育哲学 (1)

池田 洋子 エラスムスに於けるキリスト教とヒューマニズムの構造

## B 教育心理学 なし

## C 視聴覚教育法 (1)

石川 建 学校放送道德番組の利用に関する実験的方法

## D 英語教育法 (3)

国広 博子 Similar Sound Sequence in Japanese and in American English —An Analysis with Sound Spectograph—

左近 和子 A Study on the Grading of English Speed Reading Materials for Japanese Students

BIBAOCO, Eva For a Synoptic Filipino English Program —An Application of the Synoptic Theory of Curriculum Practice of Freshman English in the Philippines —

## E 理科教育法 なし

## 卒業生の進路

卒業後の進路	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	計
国内進学		1				1		4	6
国外進学	3	2		2	1	1		4	13
研究職, 大学	1	7	7	5	6	5	5	6	42
小・中・高教師		3	2	4	3	5	2	11	30
文部省教育委員会等	2								2
その他	1	3	3		5	2	5	3	22
計	7	16	12	11	15	14	12	28	115

## 教育実習報告

◎ 65年度は例年同様三鷹市内の都立三鷹高校及び三鷹市立第一, 第二, 第三, 第四, 第五中学校の協力を得て, 次のように実施された。

1. 実習生総数 48 (男子 11, 女子 37)
2. 実習日程 昭和41年5月24日(月)～6月5日(土)
3. 実習校配当

協力校 実習教科		三 高	鷹 校	三 一 鷹 中	三 二 鷹 中	三 三 鷹 中	三 四 鷹 中	三 五 鷹 中	計
英	語	6	8	8	8	7	5	42	
社	会		2	1		1		4	
理	科			1				1	
数	学	1						1	
計		7	10	10	8	8	5	48	

なお65年度は東京都の公立中学の教員の募集はなく、高校のみ募集されたが、残念なことに合格者はなく、神奈川県で中学に1人就職した他、私立校にも1人就職しただけである。

- ◎ 66年度は大幅に実習生が増加（予備登録で85名）する見込であったため、従来の三鷹地区の他に中学で武蔵野地区2校、小金井地区1校、高等学校で豊多摩、杉並の2校を加え更に2、3の私立校にも特に協力を願い、例年5月中旬～6月上旬にかけて行なわれていた実習を9月上旬から下旬にかけて夏期休暇中を利用して実施された。

1. 実習生総数 60 (男子 8, 女子 52)
2. 実習日程 9月8日～21日を中心に一部9月1日～24日に亘る
3. 実習配当校

実習教科	協力校	三 鷹 高 校	豊 多 摩 高 校	杉 並 高 校	錦 城 高 校	吉 祥 女 子 高 校	三 鷹 一 中	三 鷹 二 中	三 鷹 三 中	三 鷹 四 中	三 鷹 五 中	武 蔵 野 一 中	武 蔵 野 四 中	小 金 井 東 中	計
英 語	7	2	2				7	6	6	5	6	3	3	2	49
社 会	1						4		4						9
理 科					1	1									2
計	8	2	2	1	1	1	11	6	10	5	6	3	3	2	60

本年は夏季休暇中実施という初めての試みにいろいろ利点があげられるが、何と言っても実習期間中他教科に影響を及ぼさないこと、又夏休み中に十分準備が出来たことなどは学生にとって大いに益したと思う。併し、7月卒業者は今年は特に考慮されたが、今後とも特別措置をとらなければならないことになると思われる。9月初旬には川瀬助教授が渡米されたため星野助教授が実習実施の任に当

った。都留教育学科長はじめ教育学科、語学科関係教職員ならびに臨時嘱託の上村和田実さん等、範囲に亘る実習生をよく御指導下さり、新規開拓の実習校にも好感を持っていただけた事は感謝である。

## ひ と の う ご き

### ○新任・帰任・辞任

日高第四郎教授(教育哲学)、岡部弥太郎教授(教育心理学): 1966年3月停年のため退職

モーリス・E・トロイヤー教授(教育心理学・価値観): 1966年8月退職して帰国

関屋光彦教授(基督教教育哲学): 1966年8月退職、非常勤講師となる。

小林哲也助教授(比較教育学): 1965年9月ミシガン大学及びコロンビア大学での3年間の留学を終え帰任

ジョン・A・ブラウンネル客員教授(カリキュラム論): 1965年8月1年間の滞在を終え帰国

原一雄助教授(教育心理学): 1965年11月2年間の研究生生活を終えペンシルバニア大学より帰任

ロバート・ウーリック教授(ハーバード大学名誉教授。教育思想史): 1966年10月より11月末まで教育哲学特別講義のため来学

阿久津喜弘助手(視聴覚教育): 1965年7月ミシガン州立大学に留学のため辞任

平田賢一助手(視聴覚教育): 1966年4月より着任

遠藤ひろ子助手(教育心理学): 1965年4月より着任、1966年3月辞任、替りに鈴木百合子、東尚子両助手が非常勤で勤務

宮本明子秘書: 1965年8月辞任

岡本知子秘書: 1966年4月より着任

### ○海外出張、休職

長清子教授(教育思想史): 1965年9月より休職プリンストン、ハーバード両大学で研究中。1967年3月帰学の予定

西本三十二教授(視聴覚教育): 1965年6月ストックホルムで行われた国際通信教育学会の総会に出席のため約1カ月ヨーロッパへ出張

星野命教授(臨床心理学): 1966年7月1カ月ソ連・欧州へ出張、その後10月より1カ年京都大学人文科学研究所で研究に従事

川瀬謙一郎助教授(教育哲学): 1966年9月よりハーバード大学研究員として留学のため休職